

# 宝塚古墳における円筒埴輪の製作技法と配置

～埴輪工人集団の分析から～

中野綾子

はじめに

円筒埴輪は古墳において最も出土数の多い「遺物」埴輪である。周囲と古墳を隔絶する役目を果たし、古墳に求められた権力の象徴としての機能を補完する装置でもあった。

円筒埴輪の成立については1967年、近藤義郎、春成秀爾氏が「埴輪の起源」で、吉備地方の特殊器台、特殊壺が墳墓に供献される中で発展し、その起源となったとした。円筒埴輪に関しては川西宏幸氏が編年し[川西宏幸1978]、宮内庁管理などにより発掘調査のできない巨大前方後円墳はもちろん、全国の埴輪樹立古墳の研究に大きな役割を果たした。現在では地域ごとの編年や、地域性など様々な視点からの詳細な研究も蓄積され、個別古墳の分析が進んでいる。

こうした研究状況において本論は、①宝塚1号墳に樹立された円筒埴輪を再度個別に観察し直し、②その製作技法から工人集団と集団内の工人グループを導き出し、③集団、グループ毎の埴輪樹立位置の特定によって、④当該古墳の埴輪供給体制と埴輪樹立体制の関係について明らかにしようと試みたものである。

宝塚古墳群は三重県松坂市中央部、宝塚町から光町、松坂市の市街地から2kmほど離れた丘陵の北端に位置する(図1)。現在は全長111mの前方後円墳の1号墳と、隣接する全長90mの帆立貝式古墳の2号墳、及び直径20m前後の円墳である4号墳からなる古墳群である。それぞれの墳丘上から伊勢平野の広い範囲、および伊勢湾が遠望できる。1号墳の築造期は5世紀初頭、2号墳は5世紀前半で、2号墳の被葬者は1号墳の後継者と考えられている。

昭和4年に郷土史研究者であった鈴木敏雄氏により『飯南郡花岡村考古誌考』としてまとめられ、宝塚1号墳、2号墳以外にも88基の古墳が見られる古墳群であったと紹介されている。

1号墳には墳丘上2段にわたって埴輪を巡らし、墳丘北側の前方部くびれ部付近に造り出しが付設されている。造り出しは、東西18m、南北16mと東西に長く、土橋によって墳丘部とつながっている。高さは約2mで、多くの円筒埴輪や、形象埴輪が出土している。そのため、被葬者は近畿地方に見られるような多量の円筒埴輪と多種多様な器財埴輪を古墳の周囲に並べて飾る方式を伊勢

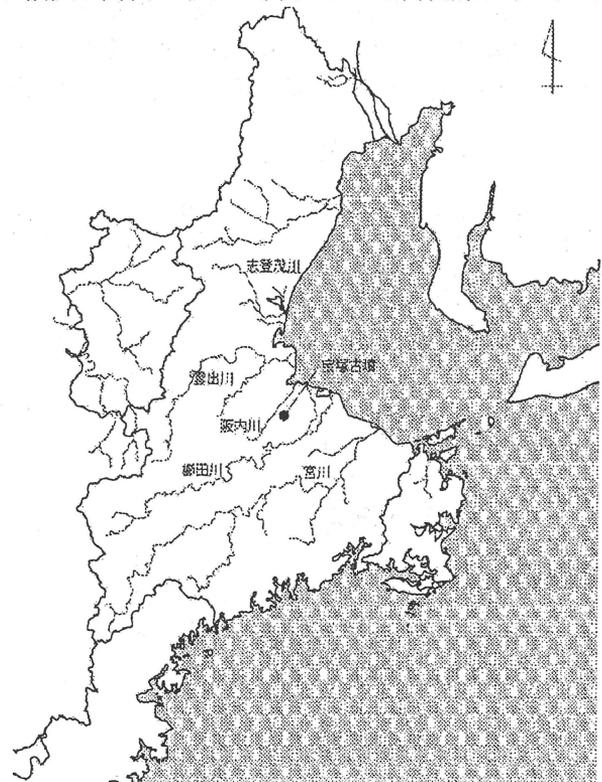


図1 宝塚古墳位置図

地域において本格的に採用した最初の人物であったと推定されている。

本論では2条3段と3条4段の円筒埴輪、円筒埴輪の円筒部に盾面を貼り付けた盾形埴輪(図2) 2条3段の円筒埴輪の上に載っていた鍔付きの壺形埴輪(図3)を素材に工人集団と配置の関係について考察する。

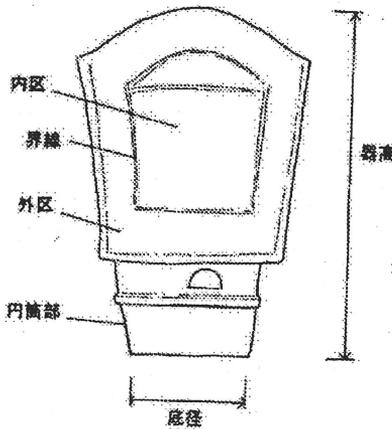


図2 盾形埴輪

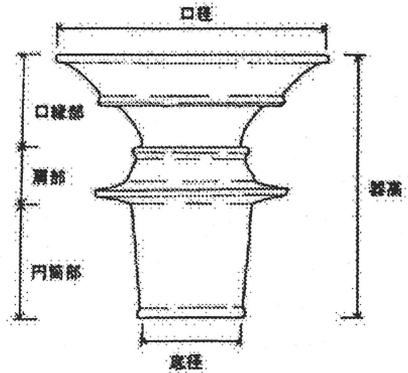


図3 壺形埴輪

### 第一章 分類方法

円筒埴輪を外面調整、内面調整、1センチあたりのハケの本数、突帯の大きさ、突帯形態、口径、口縁部形態、底部径、土色、土質、底部痕跡の有無などの項目に分けて観察し、分類した。なお、本論においては円筒埴輪の部分名称を図3の通りに定めた。また、口縁部の大きさ、突帯の大きさ、透孔の大きさは(図5、6、7)の箇所を計測した。

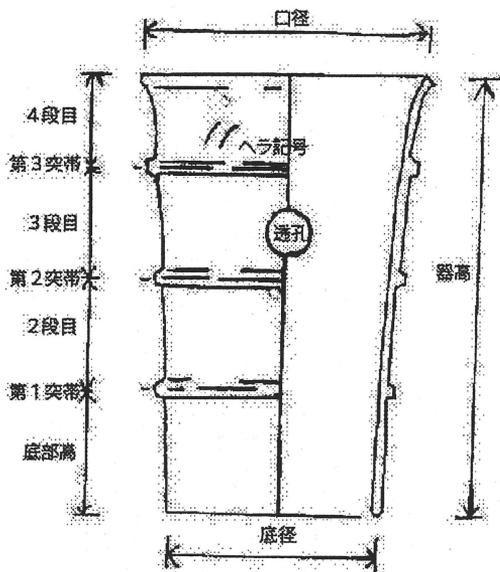


図4 円筒埴輪の部分名称

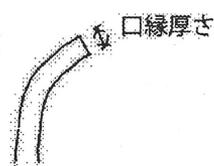


図5 口縁部の厚さ

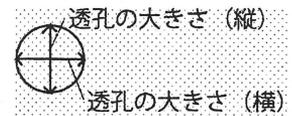


図6 透孔の大きさ

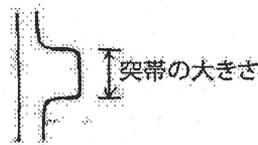


図7 突帯の大きさ

<埴輪の種類>

埴輪の種類を下記のように分類し、表記した。

※表には ( ) の簡略表記を記載する。

3条4段の円筒埴輪…円筒埴輪A (円A)

2条3段の円筒埴輪…円筒埴輪B (円B)

鐳付きの壺形埴輪…壺形埴輪

盾形埴輪…(盾)

<ハケの本数>

1cmあたりのハケの本数を下記の5つに分類した。

4本程度/cm…A

5本程度/cm…B

6本程度/cm…C

7本程度/cm…D

8本以上/cm…E

<突帯形態>

突帯の形態は太さと高さから大きくA類(断面が太くて高いもの)、a類(断面が太くて低いもの)B類(断面が細くて高いもの)、b類(断面が細くて低いもの)の4つに分類し、更に、その形状から16つに細分化した。

<外面調整>

外面調整は下記の3つに分類した。

I …タテハケのみ

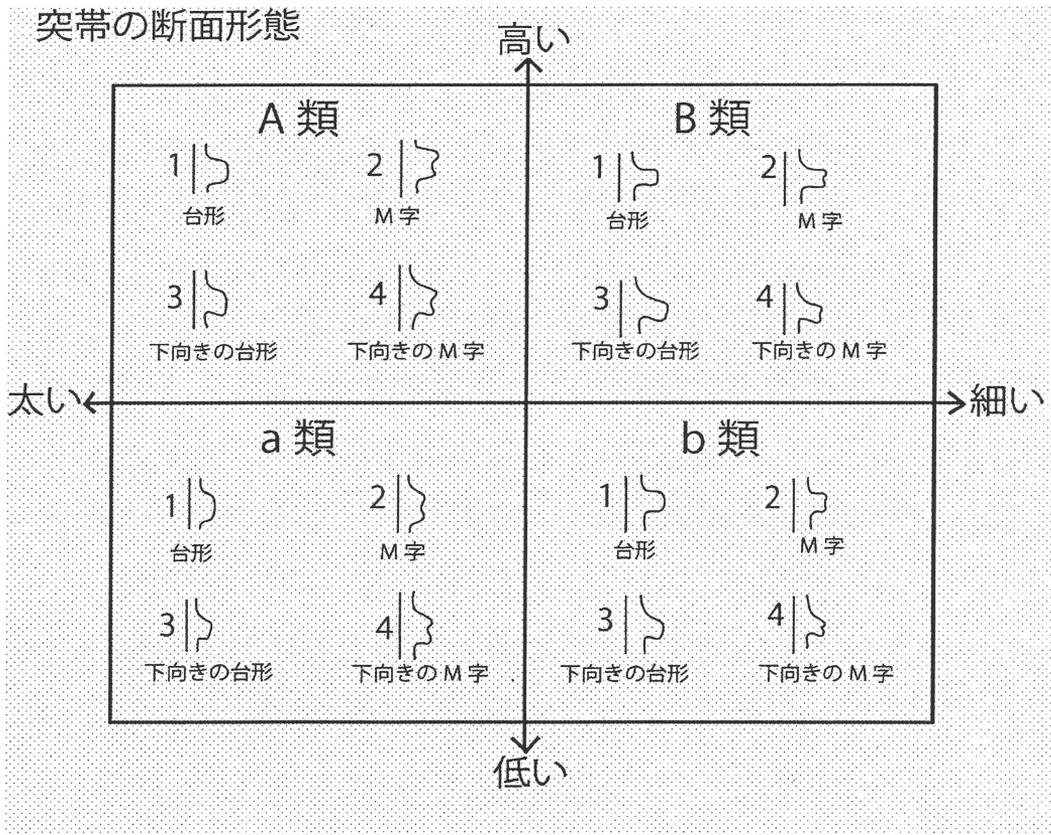
I' …ナナメハケ

II …タテハケのちヨコハケ

<内面調整>

内面調整は1のナデと並行して①~④の特徴が単一または複数見られた。

1ナデ | 底部ユビオサエ…①  
 | ヨコハケ(口縁部付近)…②  
 | ヨコハケ以外のハケ…③  
 | ユビナデ…④



<口縁部形態>

口縁部形態は形状から以下の6つに分類した。

- 端部が急に外反するもの…ア 
- 端部が直線状になるもの…エ 
- 端部が突帯状になるもの…イ 
- 端部が大きく肥厚するもの…オ 
- 端部が緩やかに外反するもの…ウ 
- 端部が三角に肥厚するもの…カ 

<透孔>

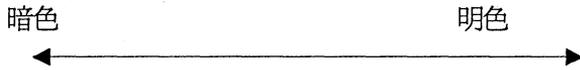
円形、半円、方形の3つに分類した。

- ・円形…○
- ・半円…△
- ・方形…□

<外面の色調>

埴輪の外表面の色調を下記のように分類した。

外表面の色調は黄土色系統と茶色系統の2種類が見られ、黄土色系統は5分類、茶色系統は6分類した。※表には ( ) の簡略表記を記載する。



暗い黄土色—濃い黄土色—黄土色—薄い黄土色—明るい黄土色  
 (暗黄土) (濃黄土) (黄土) (薄黄土) (明黄土)

暗い赤茶色—濃い茶色—茶色—赤茶色—薄い茶色—明るい茶色  
 (暗赤茶) (濃茶) (茶) (赤茶) (薄茶) (明茶)

<土質>

埴輪の土質を以下の6項目に分類した。

※表には ( ) の簡略表記を記載する。



とても悪い—悪い—悪い方—良い方—良い—とても良い  
 (1) (2) (3) (4) (5) (6)

<底部痕跡>

粘土を積みあげて埴輪を製作する際に粘土の下に何か置いてあった痕跡が底面に見られた。これを底部痕跡とし、底部痕跡の有と無の2つに分類し、更に有は3つに細分化した。

※表には ( ) の簡略表記を記載する。

- 底部痕跡が見られる—有
  - 底部痕跡の数が少ない (少)
  - 底部痕跡の数が多 (多)
  - 底部痕跡の跡が細い (細)

底部痕跡が全く見られない—無

## 第二章 埴輪工房と埴輪の配置

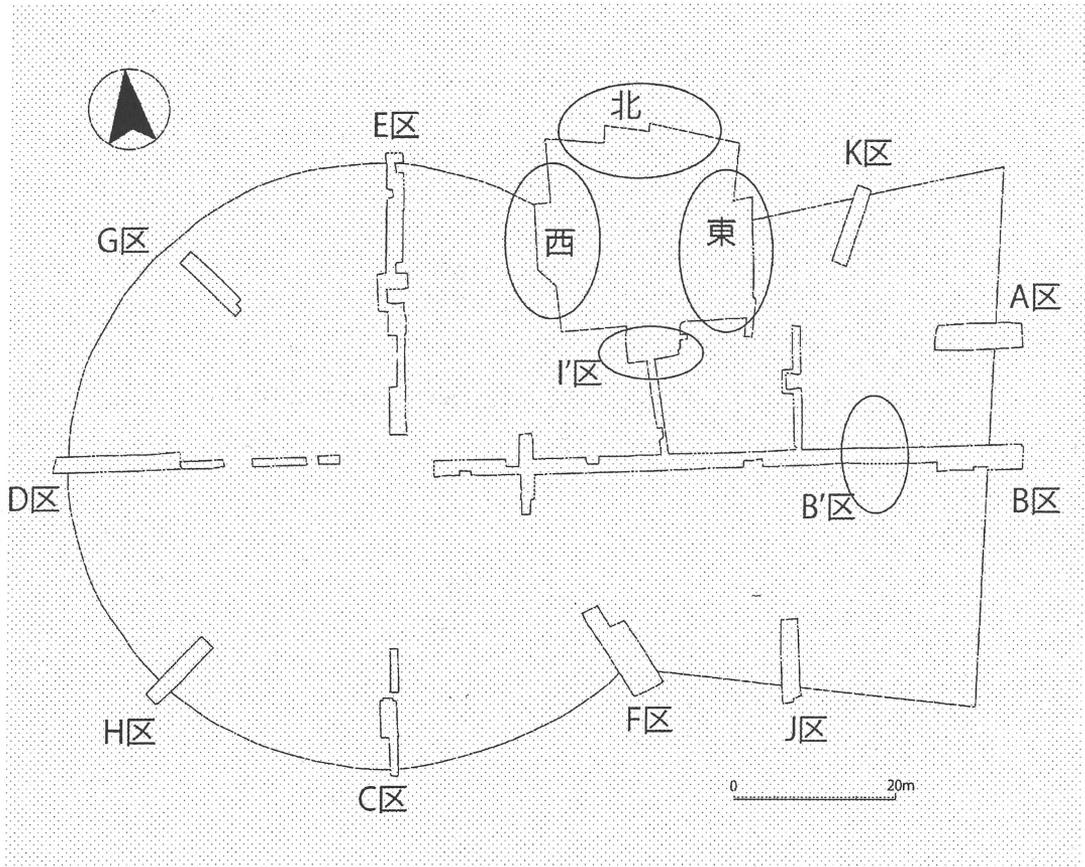


図8 出土地区名称

報告書に記載されているA～K区（図8）から出土した埴輪を先の基準に従って分類した。円筒埴輪の出土区と埴輪の番号は報告書に記載されているものをそのまま使用し、墳丘上2段目の円筒埴輪はそれぞれ、B区とI区の延長にあるので、B'区、I'区とした。また、I区（造り出し部）を詳細に分析するため、さらに東・北・西区の3区に分けて検討することとした。

まず第一に、円筒埴輪の外表面の色調に注目すると、色調が暗色傾向の埴輪と明色傾向の埴輪の2グループに分けることができた。外表面の色調に共通性があるということは、同一粘土を使用して、同一工房で製作されたと考えられる。

そこで、全体的に外表面の色調が暗色傾向の埴輪が出土している区と外表面の色調が明色傾向の埴輪が出土している区を分けたところ以下になった。

- ・ 外表面の色調が暗色傾向の埴輪→H、C、F、J、B'、I'区
- ・ 外表面の色調が明色傾向の埴輪→B、A、K、E区とI区（造り出し部の東、北、西）

これらの出土区を見ると、図9のように外表面の色調が暗色傾向の埴輪は墳丘南側と墳丘上2段目に、外表面の色調が明色傾向の埴輪が墳丘北側にまとまって見られることが分かった。

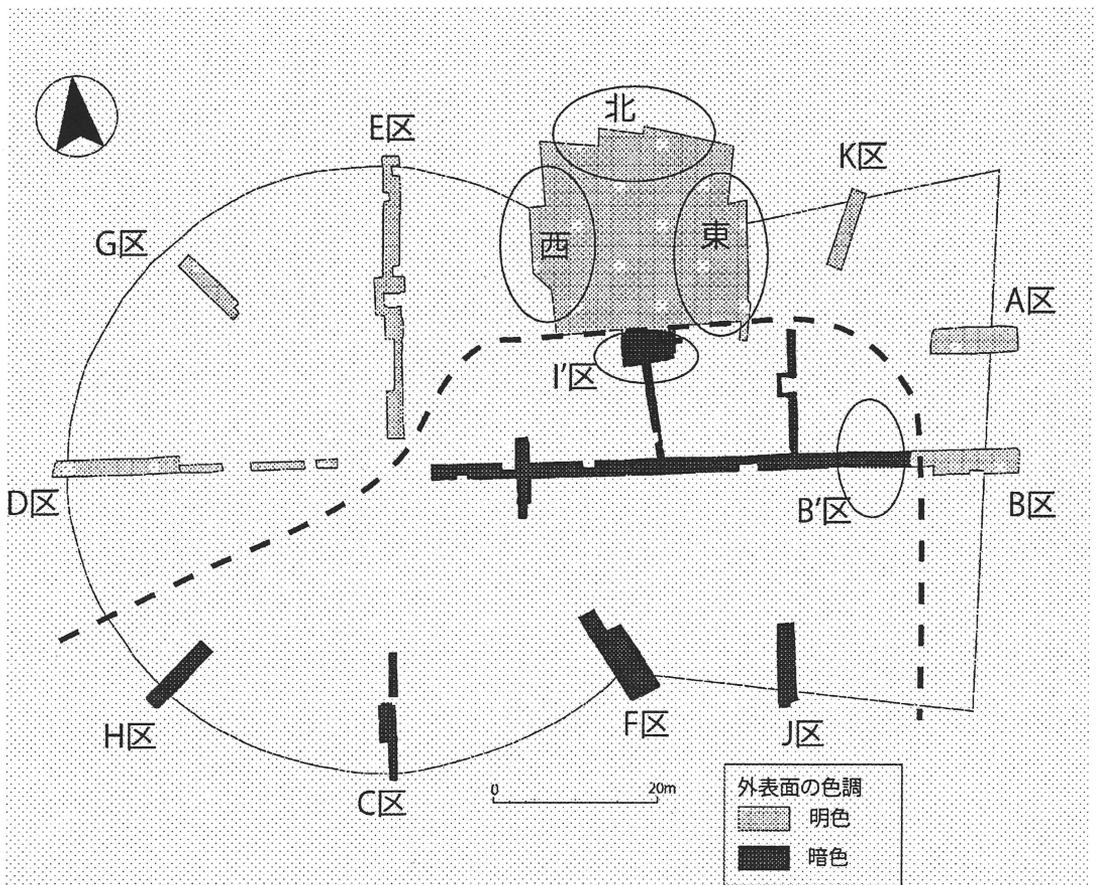


図9 外表面の色調別、埴輪の配置

そこで外表面の色調が暗色の埴輪がある墳丘南側と墳丘上2段目のH、C、F、J、B' I'区と、外表面の色調が明色傾向の埴輪がある墳丘北側のB、A、K、E区に分けて分析することにした。ただし、造り出し部（東、北、西区）の埴輪については多様性が見られるため、造り出し部のみ後の章で詳しく考察することにする。

明色と暗色という埴輪の外表面の色調の違いは材料である粘土の違いと考えられる。粘土の採掘、搬入と工房とは関係が深いので、明色と暗色の埴輪の違いは別々の場所、つまり異なる工房で製作されたと考えられる。よって、外表面の色調が明色の埴輪を製作した工房を明色工房、外表面の色調が暗色の埴輪を製作した工房を暗色工房と呼称して以下の考察を進める。

明色工房で製作された埴輪は後述するように外来の工人集団が製作した埴輪と考えられ、墳丘北側に置かれた。暗色工房で製作された埴輪は在来の工人集団と考えられ、墳丘南側と墳丘2段目に置かれた。

両工房で製作された埴輪をさらに細かく検討すると、同一工房でも外表面の色調と土質に微妙な差異が見られた。ただし、埴輪の外表面の色調については、焼成位置や焼成具合などによって変色する可能性があるため、外表面の色調が前章で分類した同じ黄土色系統6分類、茶色系統5分類の中で、隣同士の色の範囲内ならば、焼成状況による色調の差と仮定して分析することにした。

また、土質についても6分類の中で隣同士の質の範囲内ならば焼成状況や、風化の影響による差異と判断して分析を進める。

土質と外表面の色調が差異の範囲内で似通っているということは、同一の粘土で製作したと判断でき、同一工房での制作とすることができる。

ところで、同一工房で製作された埴輪でも、底部径、突帯形態など円筒埴輪の各部の特徴に着目すると、微妙な成形技法に相違点を認めることができる。これらは同一工房内の工人グループの製作技能の違いであると判断し、異なる技能を持った複数の工人グループが工房を支えていると推量できた。このグループを「〇〇工人タイプ」と呼称する。

以下、暗色工房によって製作され、配置された墳丘南側の埴輪と明色工房によって製作され、配置された墳丘北側及び前方部の埴輪を、工人タイプ別の配置を分析することで、宝塚1号墳の工房-工人と配置との関係を検討してみよう。

### 第一節 墳丘南側と墳丘2段目に置かれた埴輪

墳丘南側のH区からC、F、J、B'、I'区の順に埴輪の特徴を見ていくことにする。

まず、土質と外表面の色調から3工人タイプに分けられる。3タイプを出土区のアルファベットをとって、H、F、B'工人タイプと呼称する。さらにH工人タイプは底部径、突帯形態などの違いからH1、H2、H3の3小工人タイプに細分する。H1、H2、H3小工人タイプの埴輪をまとめてH系工人タイプと呼称する。

なお、各工人タイプの代表例を巻末に示した。

#### 1 H系工人タイプ

##### H1工人タイプ (59、60、61、62、77)

埴輪全体が残っている個体はないが、底径と底部高において、埴輪の製作における同一の特徴が見られたため同一工人タイプと判断した。

外面調整はタテハケのみで、ハケ目がA(4本程度/cm)もしくはハケ目B(5本程度/cm)と粗い。内面調整にナデを施し、底部には明確なユビオサエの痕が見られる。突帯形態は主にb類(断面が細くて低いもの)で、底径が約20cmと小さい割に底部高が16cm程度と他の円筒埴輪に比べて少し長い。全体的に薄い造りで、外表面の色は濃い黄土色、土質が悪い。また、底部痕跡はほとんど見られない。

##### H2工人タイプ (22、23、24、25)

第一突帯までしか残存残っていないが突帯形態に同一の特徴が見られたため同一工人タイプと判断した。

外面調整、ハケ目、底径、土色、土質、薄い造りなどの特徴はH1工人タイプと似ているが、内面調整に明確なユビオサエの痕は見られない。突帯形態がH1と同じb類だが、3(断面が細くて低い下向きの台形)の特徴を持ち、底部形成痕が細かい点で異なる。

##### H3工人タイプ (63、70)

全体が残っており、厚い造り、突帯形態に同一の特徴が見られ同一工人タイプと判断した。

外面調整、ハケ目、底径、土色、土質などの特徴はH1工人グループと似ているが、突帯の形態がA類(断面が太くて高いもの)と大きく、厚い造りとなっており、底部痕跡が顕著に見られる点でH1、H2工人タイプと異なる。

#### 2 その他の工人タイプ

## F工人タイプ (35、36、37、38、39、41、42、43、44、66、67、68)

埴輪全体が残っている個体はないが、土質から一つの工人タイプと判断した。

外面調整はタテハケのみで、ハケ目がB (5本程度/cm) もしくはハケ目C (6本程度/cm)。内面調整にナデを施し、底部にユビオサエ痕が見られる個体がある。突帯形態は主にb類 (断面が細くて低いもの) だが、一部a類 (断面が太くて低いもの) が見られる。底径が30cm前後と非常に大きく、全体的に薄い、丁寧で安定した造りである。しかし、土質が非常に悪く、外表面の色は暗い黄土色で全体的に黒ずんでおり、底部痕跡が見られる。

## B'工人タイプ (75、76、78、125、126、127、128、129、130、131、132、133)

残存率が低く、第一突帯まで残っている個体がなく、底部のみしか見られないが、外表面の色調から同一工人タイプと判断した。

外面調整はタテハケのみで、ハケ目がB (5本程度/cm) もしくはハケ目C (6本程度/cm)。内面調整にユビナデの痕が見られる。底径が20～25cm程度で、全体的に薄い造りで土質が悪く、外表面の色は暗い赤茶色、土質が悪いが底部痕跡はほとんど見られない。

## 第二節 工人タイプと埴輪の配置

前節で墳丘南側と墳丘上2段目の埴輪をH1、H2、H3、F、B'工人タイプに分けた。ここからは上記の5つのタイプの埴輪の出土位置から埴輪配置の特徴について検討する。

図10の工人タイプ別の埴輪の配置図を見ると、以下の特徴が見られる。

- ・ H1工人タイプの埴輪が出土しているのはH、B'区
- ・ H2工人タイプの埴輪が出土しているのはC区
- ・ H3工人タイプの埴輪が出土しているのはH、J区
- ・ F工人タイプの埴輪が出土しているのは、F、J区
- ・ B'工人タイプの埴輪が出土しているのは、B'、I'区

各出土区で、同じタイプの埴輪が集中して並べられていることが分かった。全体的な特徴として、墳丘南側の隣接する区同士と、墳丘上2段目平坦面で同じ工人タイプもしくは、似た特徴を持つ工人タイプの埴輪がまとまって配置されている様を明らかにできた。

さらに細かく工人タイプと配置との関係を見ていくと、H1工人タイプの埴輪は、H区 (59、60、61、62) の4個体とB'区 (77) の1個体である。H区の4個体においては連続して並べられている。H1工人タイプの埴輪が1個体ではあるがB'区においても見られるので、H1工人タイプはH区とB'区に埴輪を並べたことが分かる。

B'区では (77) を除くと、すべてB'工人タイプであり、墳丘上2段目のB'、I'区では (77) 以外の埴輪はすべてB'工人タイプであった。そこで、H1工人タイプとB'工人タイプの特徴を比べてみると、土質、外表面の色調は異なるが、底部径、薄い造りなど円筒埴輪の各部の特徴がよく似ていることから、H1工人タイプとB'工人タイプは埴輪を製作する際に深い関係にあり、似通った製作技能を持つ工人集団だといえる。

しかし、埴輪を墳丘上に配置する際にB'工人タイプの埴輪は主に墳丘2段目に、H1工人タイプの埴輪は主にH区に並べたのである。ただし、H1工人タイプの埴輪はB'工人タイプの埴輪に混じって、一部2段目にも並べられた。

H2工人タイプの埴輪はC区のみ (22、23、24、25) 4個体で、連続して並べら

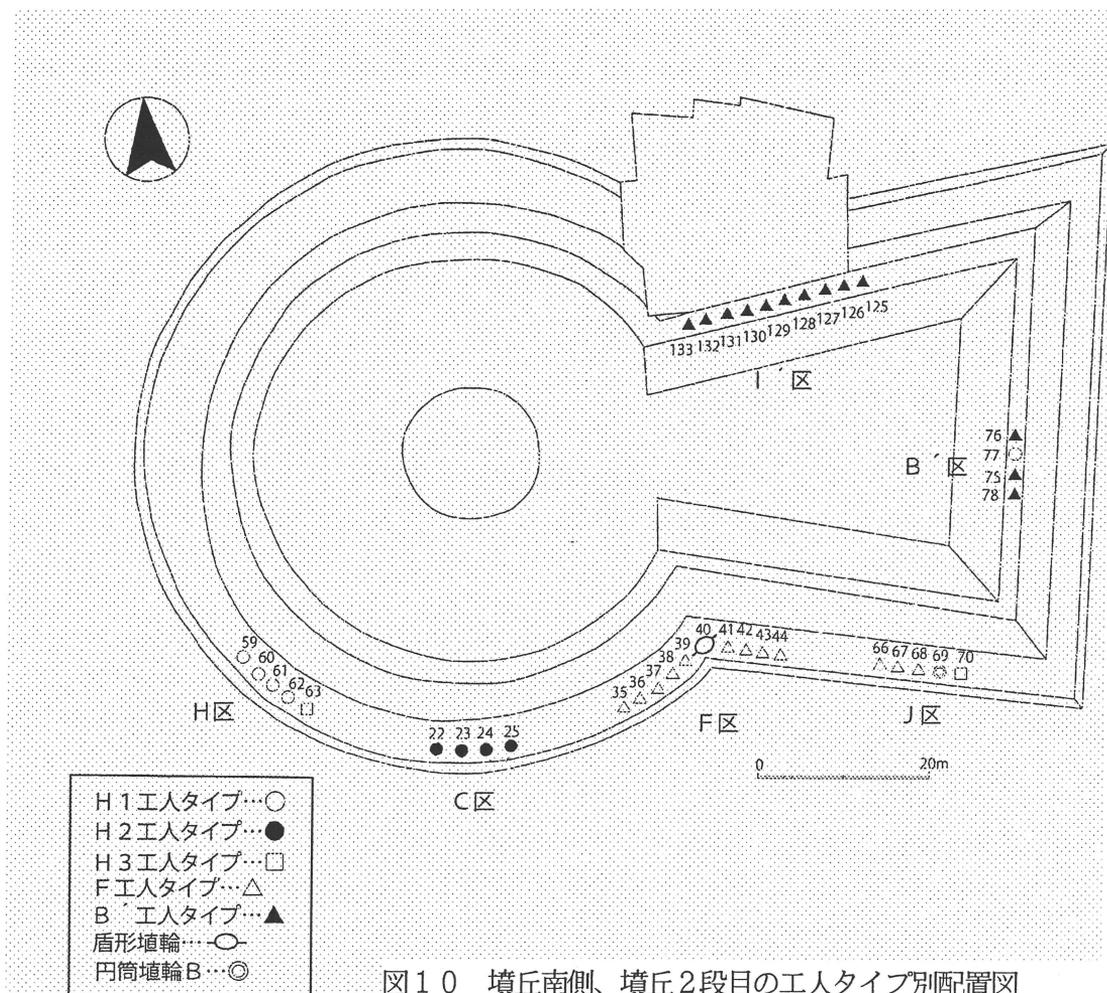


図10 墳丘南側、墳丘2段目の工人タイプ別配置図  
 ※ (円筒埴輪A以外は埴輪の種類を表記した)

れている。H2工人タイプは、H1工人タイプと同様の粘土で製作されたと考えられるが、突帯形態において異なる特徴が見られる。H1工人タイプの埴輪はC区の西隣のH区に多く見られる。よって隣接する区で同じ粘土で製作された埴輪が並べられていたのである。

H3工人タイプはH区(63)とJ区(70)の2個体のみである。にもかかわらず2つは離れた位置から出土しており、H系工人タイプの埴輪は広範囲に並べられていたことがわかる。

F工人タイプの埴輪はF区(35、36、37、38、39、41、42、43、44)の9個体とJ区(66、67、68)3個体であり、F、J区共に連続して並べられている。配置をみると、F工人タイプの埴輪はF区から東隣のJ区(68)にわたる広い範囲で並べられていたと考えられる。しかし、F区の東隣のC区ではH2工人タイプの埴輪が見られるので、F工人タイプの埴輪はC区までは並んでいなかったと推定できる。

B'工人タイプの埴輪はB'区(77)の一個体を除く、墳丘2段目の埴輪に見られた。よって、B'区からI'区にわたる広い範囲で並べられていたと考えられる。

### 第三節 墳丘南側と墳丘2段目の埴輪配置の特色

以上のように5つの工人タイプの埴輪とその出土位置を見てみると、同じ工人タイプの埴輪は連続して並べられる傾向が強く見られた。墳丘上に埴輪を並べる際にまとめて並べるよう意識〔指示〕されていたのである。

そこで、H1工人タイプと同じ粘土で造られたと考えられるH2、H3と、似通った製作技術を持つB'工人タイプの埴輪が主に並べられている、H、C区、墳丘上2段目B'I'区的位置を見ると、H区、C区は前方後円墳において、北側から見えない位置にある。また、B'、I'区は墳丘上2段目の埴輪列であり、I'区は造り出し部の南側に位置するものの、墳丘1段目の埴輪列よりも見えにくい位置であった。

F工人タイプの埴輪の土質はH系、B'工人タイプに劣るが、底径30cm前後と非常に大きく、丁寧で、安定した造りの埴輪である。墳丘南側のくびれ部分に置かれた(40)の盾形埴輪の周辺に並べられた。外からの見栄えが良いためではなかろうか。

H1、2、3、F、B'工人タイプに分け埴輪と配置について見てきたが、墳丘南側と墳丘2段目の埴輪には主に以下のような特徴が見られた。

① 墳丘南側、墳丘2段目の埴輪は土質、外表面の色調差異から、H系、F、B'工人タイプに分ける。

② 同じ暗色工房で製作され、墳丘に並べる際、外から見えにくい位置を選んで各工人集団が墳丘南側と墳丘2段目に埴輪をまとめて並べた。

### 第四節 墳丘北側の埴輪の配置と工人タイプ

#### 〔1〕 工人タイプの分類

造り出し部(東、北、西)を除き、墳丘北側のB区からA、K、E区順に特徴を見ていく。

土質、外表面の色調は似ており、明色工房によって生産された埴輪である。しかし、円筒埴輪各部の成形技能において差異を認めることができるため、2工人タイプに分類した。2工人タイプを、埴輪が出土している区のアルファベットをとって、B、E工人タイプと呼称する。さらに、B工人タイプについては外表面の色調の違いからB1、B2工人タイプに細分化し、B1、B2工人タイプの埴輪をまとめてB系工人タイプと呼称する。なお、各工人タイプの代表例の埴輪は巻末資料に掲載した。

#### 1 B系工人タイプ

##### **B1工人タイプ** (11、12、13、14、16、17、18、4、5、6)

第一突帯までしか残存していないが、底部径と底部高において、同一の特徴が見られたため同一工人タイプと判断した。

外面調整にタテハケかナメハケかヨコハケが見られる。ハケ目がC(6本程度/cm)もしくはD(7本程度/cm)と細かい。内面調整に底部にユビオサエと内面にユビナデ痕が見られる場合がある。突帯形態は主にB類(断面が細くて高いもの)で、底径が25cm以上の埴輪が多く、底部高が12~14cmと他の円筒埴輪に比べて短い。全体的に造りが厚めで、外表面の色調は黄土色で土質がとても良い。また、底部痕跡はほとんど見られず、外面に剥離痕が見られる場合がある。

##### **B2工人タイプ** (1、2、3)

B1工人タイプの埴輪と同様、第一突帯までしか残存していないが、底部径と底部高に同一の

特徴が見られる。ただし、外表面の色調がB1工人タイプと異なるため別工人タイプとした。

ハケ目、突帯形態、底径、底部高、土質、厚めの造りで、底部痕跡がほとんど見られないなど多くの特徴はB1工人タイプと似ているが、内面調整に底部ユビオサエとユビナデ痕以外に、ハケ目が見られる場合がある。また、外表面の色調が濃い茶色など茶色系統という点でB1工人タイプと異なる。

## 2 E工人タイプ

### E工人タイプ (28、29、30、31)

埴輪全体が残っている個体はないが、突帯形態、底径、厚い造りで歪みが見られる点等、同一の特徴が見られたため同一工人タイプと判断した。

外面調整はタテハケのみで、ハケ目がD(7本程度/cm)、内面調整にユビナデ痕が見られる場合がある。突帯形態はA類(断面が太く高いもの)で底径が約23cmと小さい。全体的に厚く、歪みが見られるなど雑な造りだが、外表面の色調は黄土色か明るい茶色で土質は良い。また、底部痕跡や外面に剥離痕が見られる場合がある。

#### 〔2〕 工人タイプと埴輪の配置

北側の埴輪をB系工人(B1、B2)とE工人タイプ毎に埴輪の出土位置について分析してみよう。

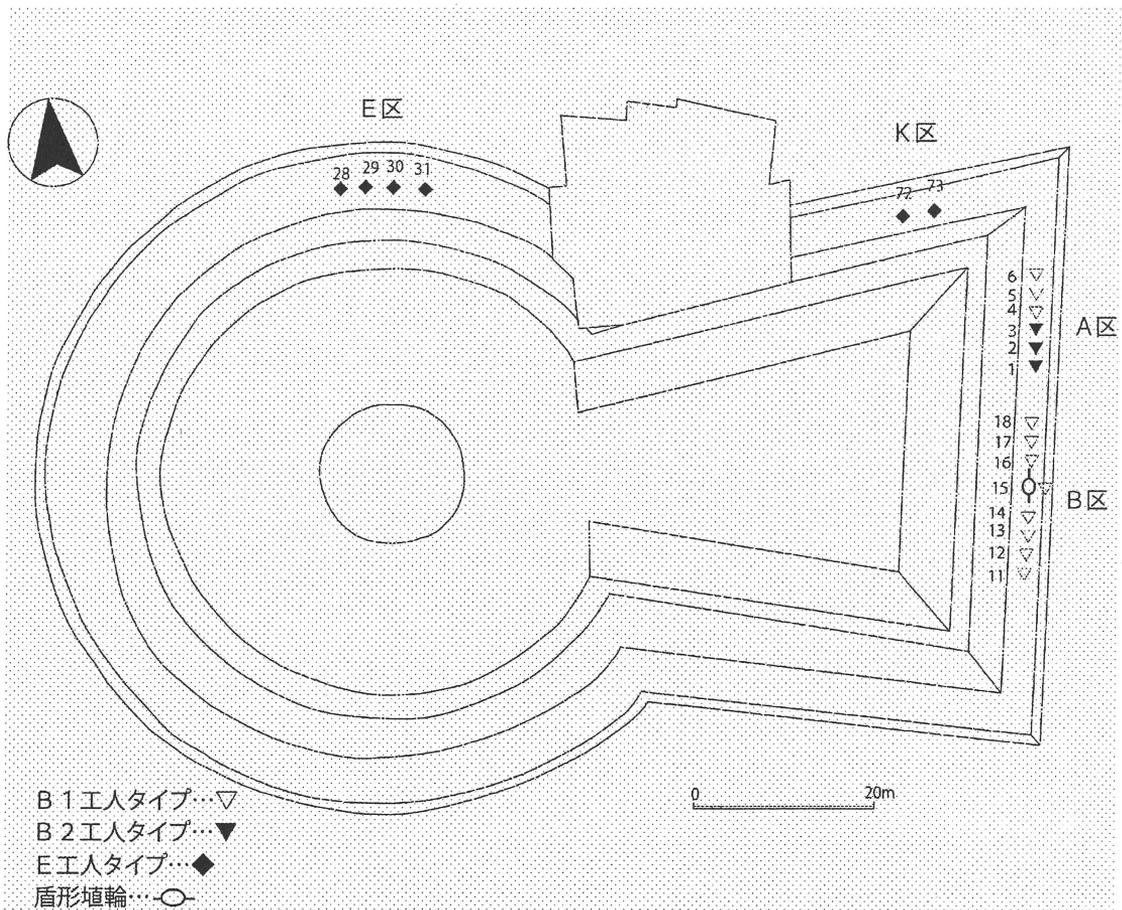


図11 埴丘北側の工人タイプ別配置図※(盾形埴輪は埴輪の種類と、工人タイプの両方を表記した)

図11の工人タイプ別の埴輪の配置図を見ると、以下の特徴が見られる。

- ・ B1工人タイプの埴輪が出土しているのはB、A区
- ・ B2工人タイプの埴輪が出土しているのはA区
- ・ E工人タイプの埴輪が出土しているのはK、E区

よって、墳丘北側においても、前章の墳丘南側と墳丘2段目と同様に各出土区で、同じタイプの埴輪が集中して並べられていたことが分かった。全体的な特徴として、墳丘の前方部と北側に似た特徴を持つ埴輪が配置されていたことを指摘できる。

さらに細かく工人タイプと埴輪の配置を見ていくと、B1工人タイプの埴輪はB区(11、12、13、14、15、16、17、18)の7個体とA区(4、5、6)の3個体である。B、A両方の区で連続して並べられている。また、B1工人タイプの埴輪がA区にも見られることから、B区からA区においてはB1工人タイプの埴輪が並べられていたと考えられる。しかし、K区においてはB1工人タイプの埴輪は見られないため、K区までB1工人タイプの埴輪は並べられていなかったと推定できる。

B2工人タイプはA区のみ(1、2、3)3個体で、連続して並べられている。同じA区内でB1工人タイプの埴輪が連続して並べられているので、B1工人タイプとB2工人タイプの特徴を比べてみると、外表面の色調は異なるが、底部径と底部高に同一の特徴が見られることから、B1工人タイプとB2工人タイプは共通した製作技術を持つ工人集団だと考えられる。

E工人タイプはK区(72、73)の2個体とE区(28、29、30、31)の4個体である。K、E両方の区で連続して並べられている。また、K区とE区は造り出し部を挟み、大きく離れていることから、E工人タイプの埴輪は墳丘北側の広い範囲にわたって並べられていたと推定できる。

### 〔3〕 墳丘北側の埴輪の特色

以上のように3つの工人タイプの埴輪とその出土位置を見てみると、前章の墳丘南側と墳丘2段目と同様に、同じ工人タイプの埴輪は連続して並べられる傾向が強く見られた。墳丘北側でも墳丘上に埴輪を並べる時にまとまって並べるよう意識されていたのである。

前述した通り、E工人タイプの埴輪は広範囲に並べられていた。E工人タイプの埴輪が主に並べられているK・E区の位置を見ると、儀礼、祭祀の場であるとされる造り出しがあり、K区とE区は造り出し部につながる墳丘1段目の埴輪である。前方後円墳上において、大変人目につきやすい位置に配置されていた。

次に、E工人タイプとB系工人タイプ埴輪を比較してみよう。

E工人タイプはB系工人タイプと同じ粘土用いる明色工房で製作されたと考えられるが、E工人タイプは歪みが顕著に見られ、造りが雑である。しかし、B系工人タイプの埴輪は外面調整にヨコハケされているものがあるなど、全体的に丁寧な造りであり、底部高は短いものの、底径はE工人タイプよりも大きい埴輪である。

本来ならば見栄のいいB系工人タイプの埴輪を、造り出しがあるE、K区に置くのが妥当である。にもかかわらず並べられなかった理由として考えられるのは、B、A区こそ前方後円墳の正面であるとする意識であろう。後円部に埋葬された被葬者を守護する正面に丁寧で綺麗な造りの埴輪を置いたのではなからうか。

さらにB区の埴輪を検討すると、盾形埴輪の代わりに置かれた巨大な円筒埴輪(15)を確認できる。突帯が巨大化し、底部高が長い特殊な埴輪である。丁寧な造りであり、B系工人の

製作した埴輪だと考えられる。しかし、何故盾形埴輪ではなく巨大な円筒埴輪を置いたのであろうか。

墳丘南側のF区で出土した(40)の盾形埴輪(図10)は、墳丘南側と墳丘2段目のどの工人タイプの特徴にも当てはまらない特殊な埴輪であった。土質が良く、外表面の色調も明色の埴輪で、墳丘北側の埴輪群に共通してみられる特徴をもっていた。つまり、墳丘北側の工人が製作した埴輪が、唯一墳丘南側に並べられている特殊な例ということができる。さらに、(40)の盾形埴輪の円筒部とB系、E工人タイプの埴輪を比べてみると、突帯形態など異なる点が見られる。(40)の盾形埴輪製作者はB系、E工人タイプとも異なるグループに属していた。

B区ではF区(40)の盾形埴輪のように明色工房の他の工人タイプが製作した盾形埴輪を配置しなかった。代わって、B系工人タイプの円筒埴輪を巨大化させ、盾形埴輪の代用とした。こうしたありかたから、B系工人集団は盾形埴輪を造る技術を持たない工人集団であったと考えられるが、あくまでB区には、他の工人集団が製作した埴輪を並べることはなかった。被葬者の正面を自分たちの製作した埴輪で守る、という強い思いがあったのかもしれない。

以上、B1、B2、E工人タイプ毎に埴輪と配置について検討してきたが、墳丘北側の配置には次の様な特徴を認めることができた。

- ① 墳丘北側の埴輪は各部分の製作技法に差異から、B系、E工人タイプに分けることができる。
- ② 明色工房で製作され、墳丘に並べる際、被葬者の正面を意識しつつ、各工人集団が墳丘北側に埴輪をまとめて並べた。

#### 〔4〕 墳丘南側、墳丘2段目と墳丘北側の比較

これまで埴輪の外表面の色調に注目し、暗色工房の生産した埴輪と明色工房の埴輪の2工房が分担して埴輪生産を担ったことを明らかにした。両工房は墳丘南側と墳丘2段目、墳丘北側のそれぞれに製作した埴輪を配置した。さらに工房内の工人単位にまで細分して分布を調べると、工人グループ毎に樹立が分担されていた事実を確認できた。造り出しを除く墳丘部の埴輪配置を工人グループ毎に示したのが図12である。

くびれ部や前方部中央など特別な位置を除き、同一工人タイプの埴輪がまとめて並べられている姿を一目瞭然と確認することができる。

造り出し部を除く墳丘部において、墳丘南側、墳丘2段目と墳丘北側の埴輪を比較すると(表1)のようである。こうした特徴からも両工房の埴輪製作技術の系譜が全く異なっていたことを明確に知ることができる。

表1 墳丘南側、墳丘2段目と墳丘北側の特徴比較表

場所	工人タイプ	外面調整	ハケ目	突帯形態	土色	土質	備考
墳丘南側 墳丘2段目	H系、F、B' 工人タイプ	タテハケ	A、B、C (4~6本程度/ cm)	b類	暗色	悪い	埴輪の造りが薄い
墳丘北側	B系工人タイプ	タテハケ	C、D (6~7本程度/ cm)	B類	明色	良い	埴輪の造りが厚い、剥離痕、丁寧
	E工人タイプ	タテハケ ナナメハケ ヨコハケ	C、D (6~7本程度/ cm)	A類	明色	良い	埴輪の造りが厚い、剥離痕、歪み

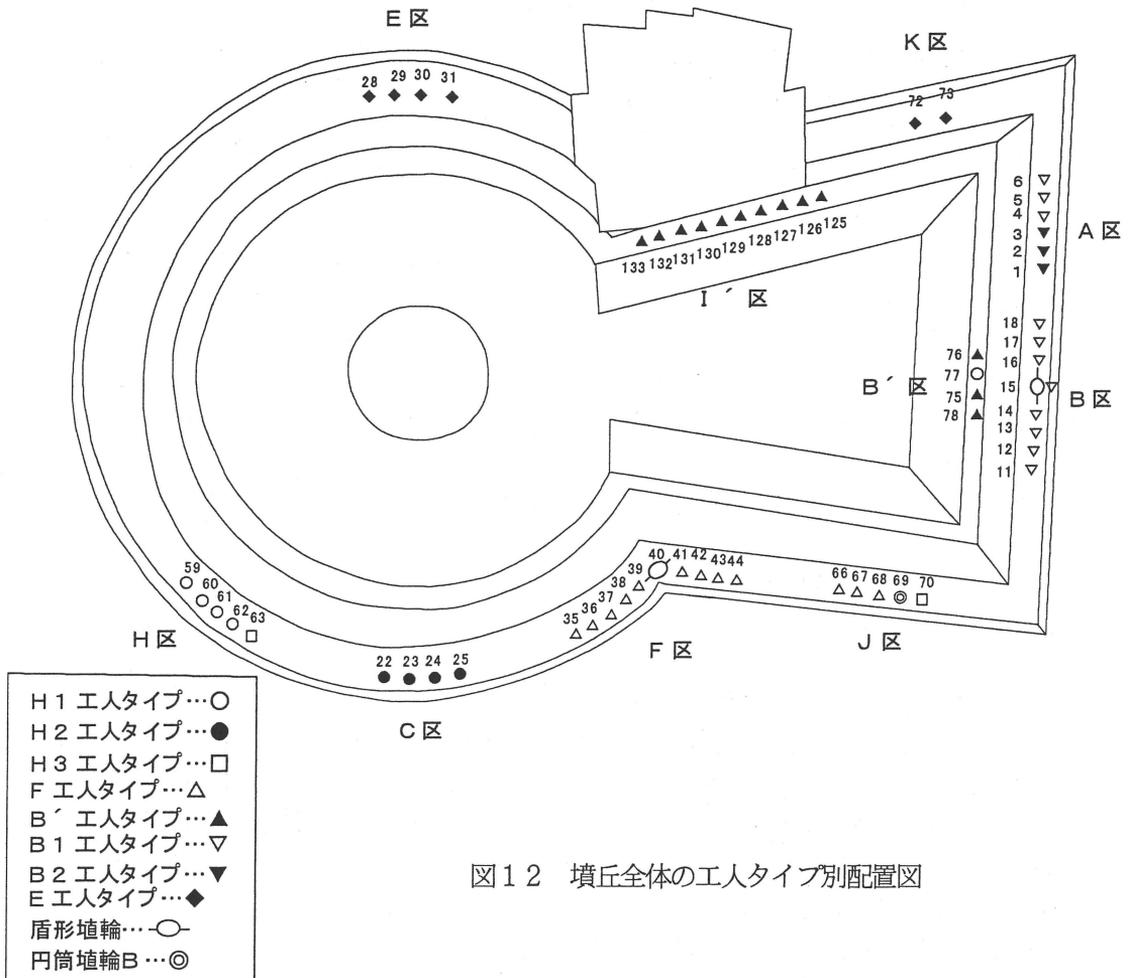


図12 墳丘全体の工人タイプ別配置図

※墳丘北側のB系工人タイプとE工人タイプは工人集団の製作技法の違いが見られるため分けて表にした。

前方後円墳の正面である前方部と前方後円墳祭祀の空間である造り出し部、いずれも被葬者及び後継者の支配する人民が最も視界に入れやすい空間である。均一な技術でもって埴輪生産をまだ担うことのできなかつた宝塚1号墳では、見栄えを意識して、技術の稚拙なH系、F、B' 工人グループが生産した埴輪を、外から見えにくい位置の墳丘南側と墳丘2段目に並べ、埴輪生産を伝習したB系工人タイプとE工人タイプの工人集団は最もよく見える造り出しや墳丘北側に並べたのである。しかしその中でも、B系工人集団の工人達は前方部を、E工人タイプの工人集団は造り出しがある北側をそれぞれ分担した。

以上のことから、宝塚1号墳では、工房毎に、工人が生産した埴輪を管理、搬入し、予め定められていた配置すべき場所も定められていたことが明確になった。あるいは、工人集団ごとに長が定められ、埴輪を墳丘に並べる際には、彼らの指示で設置していったのかも知れない。

### 第三章 造り出し部の工人と埴輪の配置

造り出し部は祭祀の場であったのだろう、家形埴輪、冪形埴輪、盾形埴輪、壺形埴輪が配置され、船形埴輪が造り出し部付け根に隠された。円筒埴輪の配置も工夫が凝らされ、見栄えの良さだけではない新たな趣向が凝らされていた。造り出し部の埴輪配置を分析すると、墳丘部を飾った工人集団とは、趣の異なる特徴が見えてくる。

#### 第一節 形象埴輪工人による円筒埴輪の製作

造り出し部の埴輪の第一の特徴は、墳丘北側と同様に外表面の色調が明色、明色工房の製作になる埴輪で飾られている点にある。第二の特徴は、透孔に円形と半円形の両種混交している点にある。

さらに造り出しの地区ごとの配置にも興味深い特徴が認められる。

##### 1 造り出し部西側の土橋付近の埴輪 (134、135、199～202、207)

表2によって、造り出し部の円筒埴輪が墳丘部に比べて、土質、外表円の色調、各部の特徴が突出して優れていることが知られる。造り出し部の埴輪には外面調整にタテハケ、ナナメハケ、ヨコハケが見られ、突帯は大きく、突帯形態も大半がA類のb(断面の高いM字)という明確なM字形を採る。透孔は半円形で、土質は良質である。外表面の色調は明るい茶色を呈し、ヘラ記号の認められる例がある。

これらを墳丘部や造り出し部の盾形埴輪の円筒部と比較したのが表2である。外面調整、ハケ目、透孔、突帯形態に明確なM字形が見られる点等に多くの共通点を見いだせる。

番号	出土区	種類	外面調整	ハケ	内面調整	突帯大きさ			突帯形態				透孔	
						①	②	③	①	②	③	④		
134	西	円B	I	D	1	1	1.4		A2	A2				○
135	西	円A	I'	D	1	1.2	1		A1	A1				△
199	西	円B	I	D	1-①④		1.2			A2				○
200	西	円B	II		1-①②④			0.8				A3		△
201	西	円B	I	D	1			1.4		A2				○
202	西	円B	II	D	1-①④	1.2	1.1		A4	A2				○
207	西	円A	I	D	1									○
40	F	盾	II	C	1	1.2	1.2	0.9	A2	A4	A1			△
20	B	盾	I	C	1-④		1.2			A2	A1			○
9	A	盾	I	D					A2	A1				○
214	東	盾	I'	D	1-①④	1.3			A2					△
213	北	盾	II	D	1-①④	1.3	1.1		A2	A1				△
215	西	盾	II	D						A2	A1			△
216	西	盾	II	D					A1	A1	A1	A2		△
217	西	盾	II	D					A2	A2	A2	A2		△
211	西	盾	I'	D	1-①④	1.2	0.9		A1	A1				△

表2 円筒埴輪と盾形埴輪の比較表

円筒埴輪の製作集団と盾形埴輪などの形象埴輪製作集団に共通点を見いだせるのである。

### **Ⅰ工人タイプ**(134, 135, 199~202, 207, 211~214)

形象埴輪を製作した工人集団が製作した円筒埴輪をⅠ工人タイプとする。造り出し部において西側の土橋付近の(134,135、199~202,207)以外にⅠ工人タイプと同様の特徴をもった円筒埴輪には、盾形埴輪の円筒部と考えられている(211~214)がある。

埴輪全体が残っており、外表面の色調から同一工人タイプと判断した。

外面調整がタテハケかナナメハケかヨコハケ。ハケ目がD(7本程度/cm)もしくはE(8本程度/cm)と非常に細かい。突帯が大きく、突帯形態が主にA類のb(断面の高いM字)と明確なM字形が見られるものが多い。口縁部形態がイ(端部が突帯状になるもの)かカ(端部が三角に肥厚するもの)か、ア(端部が急激に外反するもの)で、透孔が円形もしくは半円形。全体的に造りが厚め、外表面の色調が明るい茶色で、土質がとても良い。また、底部痕跡、剥離痕、ヘラ記号見られる場合がある。

## 2 造り出し部に見られる新たな工人タイプ

造り出し部の埴輪を観察すると、Ⅰ工人タイプ以外に土質と外表面の色調から、3工人タイプを識別できる。Ⅰ工人タイプと突帯形態などで共通した特徴を持つが、外表面の色調等が微妙に異なる埴輪群である。Ⅰ工人タイプの影響を受けた工人が製作した埴輪と仮定した。

**BI系工人タイプ** 外表面の色調と土質が及び外面調整、製作技能など、円筒埴輪の各部の特徴において、B系工人タイプと似た特徴が見られる埴輪群である。BI系工人タイプはさらに突帯形態の違いからBI系-1、BI系-2、BI系-3(突帯がなくて判別できないもの)と3つに細分化できる(巻末資料参照。以下同じ)。

### ・ BI系-1工人タイプ(153, 166~168, 171, 173, 174, 181, 183, 184, 188,193)

埴輪全体が残っている。外面調整、ハケ目、口縁部形態、透孔の形、底部痕跡、剥離痕、ヘラ記号見られる場合があるなどの特徴はⅠ工人タイプと似ており、突帯形態A類(断面が高いもの)で、一部、b(断面の高いM字形)の突帯も見られるが数は少ない。土質、外表面の色調がB系工人タイプに似ている点でⅠ工人タイプと異なる。

BI系-2工人タイプ(152, 159, 161, 165, 172, 176, 178, 182, 185, 186, 192, 195, 198, 203, 204) BI系-1工人タイプと同様に埴輪全体が残っている。外面調整、ハケ目、口縁部形態、透孔の形、土質、外表面の色調がB系工人タイプに似ており、底部痕跡、剥離痕、ヘラ記号見られる場合があるなどの特徴はBI系-1工人タイプと同一だが、突帯形態が主にB類(断面が細くて高いもの)で、一部f(断面の細くて高いM字形)が見られる点でBI系-1工人タイプと異なる。

BI系-3工人タイプ 突帯が残ってないために、BI系-1/2、2工人タイプの分類が出来ないもの。

**BE工人タイプ**(137,138,143~148) 外表面の色調が赤茶色の工人タイプの埴輪である。造り出し部西側の埴輪列に認められる。これらには、B系工人タイプとE工人タイプの特徴が見られるので、BE工人タイプと呼称した。埴輪全体が残っている。外面調整がタテハケのみ。ハケ目がD(7本程度/cm)もしくはE(8本程度/cm)と非常に細かい。内面調整に底部にユビオサエと内面にユビナデ痕が見られる場合がある。突帯形態はB類(断面が細くて高いもの)で、口縁部形態は主にイ(端部が突帯状になるもの)、透孔は円形のみが見られ、外表面の色調

が赤茶色で土質が良い。また、底部痕跡、歪み、剥離痕、ヘラ記号見られる場合がある。

**N工人タイプ** (139~142) 西側の埴輪列にあつて外表面の色調が薄い黄土色の埴輪である。残存率が低く、第一突帯まで残っている個体がなく底部までしか見られないが、外表面の色調から一つの工人タイプと判断した。外面調整がタテハケかナナメハケ。ハケ目がE (8本程度/cm) と非常に細かい。内面調整に底部にユビオサエと内面にユビナデ痕、外表面の色調が薄い黄土色で、土質が良く、底部痕跡が多く見られる場合がある。

## 第二節 工人タイプと埴輪の配置

以上のように新たに造り出しで見られた工人タイプを6つに分けたが、造り出し部の埴輪には、上記の新たな6つの工人タイプの他に、墳丘部で見られた、F、B系、E工人タイプの埴輪が見られた。

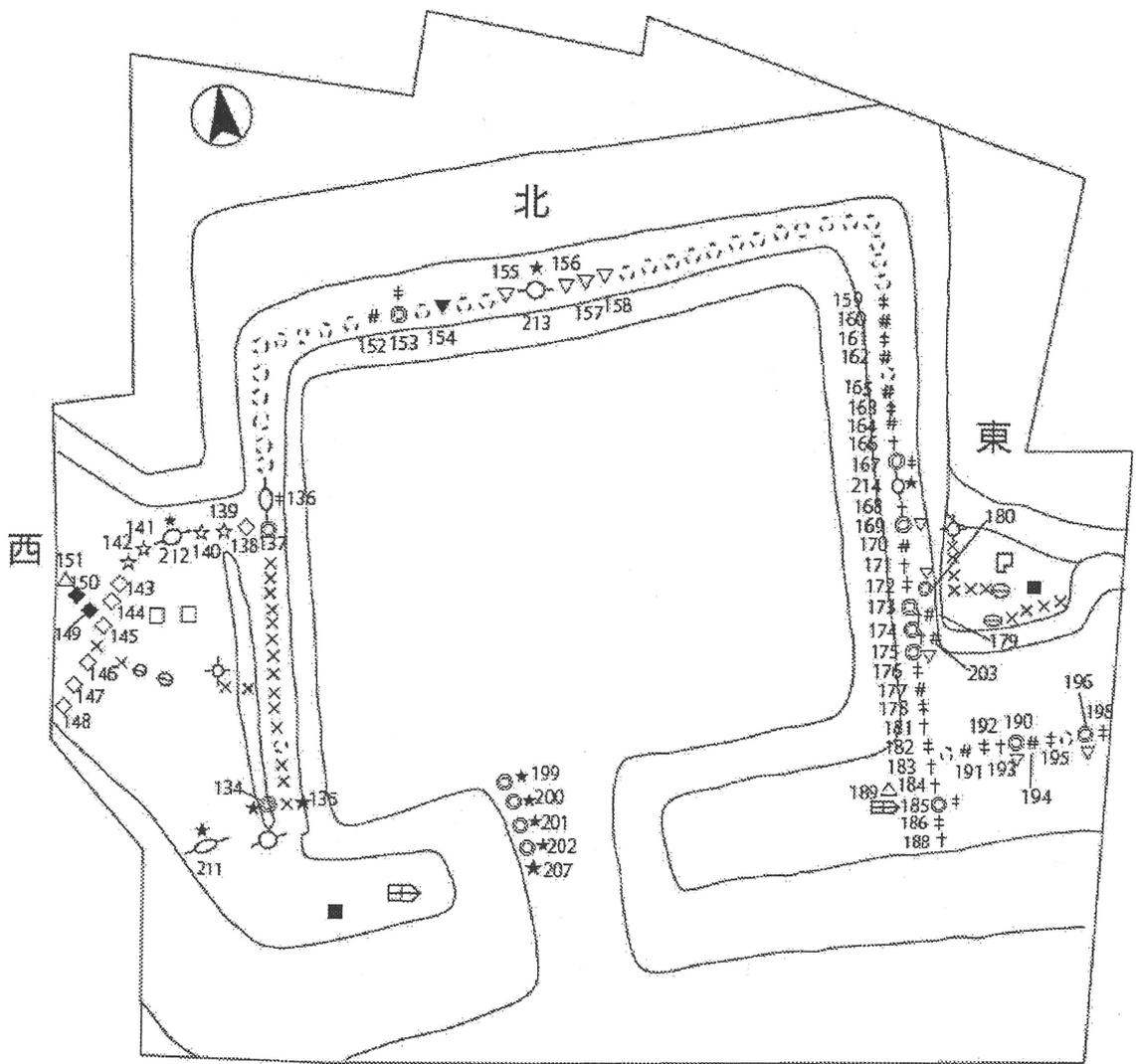
図13の工人タイプ別の埴輪の配置図を見ると、以下の特徴が見られる。

- ① F工人タイプの埴輪が出土しているのは、東、西区
- ② B系工人タイプの埴輪が出土しているのは、東、北区
- ③ E工人タイプの埴輪が出土しているのは、西区
- ④ I工人タイプの埴輪が出土しているのは、西側土橋付近(東、北、西の盾形埴輪の円筒部)
- ⑤ BI系-1工人タイプの埴輪が出土しているのは、東、北区
- ⑥ BI系-2工人タイプの埴輪が出土しているのは、東、西区
- ⑦ BI系-3工人タイプの埴輪が出土しているのは東、北区
- ⑧ BE工人タイプの埴輪が出土しているのは西区
- ⑨ N工人タイプの埴輪が出土しているのは西区

さらに細かく工人タイプと埴輪の配置を見ていくと(図13)、F工人タイプは造り出し東側の埴輪列から左に外れた位置にある(189)と西側の左端(151)に見られた。西側(151)は外面調整、ハケ目C(6本程度/cm)、底径、突帯形態においてF工人タイプの特徴が見られるものの、土質がF工人タイプの埴輪よりも良く、外面の色調は茶色と明るめである。墳丘東側の(189)は(151)と違い、F工人タイプと同様の特徴を持ち、円筒埴輪の中から船形埴輪の欠片が出土しており、他の埴輪に比べて一線を画している。この埴輪の意味については後ほど詳しく考察することにし、現段階ではその特異性のみに留める。

B系工人タイプの埴輪は東側(169,175,180,190,196)の5個体と、北側(155~158)4個体である。主に東側と北側に集中しており、東側の(169,175,180,190,196)はすべて2段目に円形の透孔を持つ円筒埴輪Bである。北側(155~158)は第一突帯までしか残存しておらず、円筒埴輪AかBか判別できない。

墳丘のA区、B区において見られたB系工人タイプの埴輪が3突帯4段の円筒埴輪Aという形で残存していないので、北側(155~158)が円筒埴輪A、Bどちらか判別できない。しかし仮に、B系工人タイプの埴輪が東側の(169,175,180,190,196)と同じ2突帯3段で上に壺形埴輪が載る円筒埴輪Bとすると、墳丘上のA、B区すべての埴輪が円筒埴輪Bということになるので、その可能性は極めて低いと考えられる。以上から、B系工人タイプの3突帯4段の円筒埴輪Aは2突帯3段の円筒埴輪Bと同様に底部高は約1.2~1.4cmと他の埴輪よりも短い特徴を持つと考えられる。



- |              |            |
|--------------|------------|
| F工人タイプ…△     | 円筒埴輪B…◎    |
| B1工人タイプ…▽    | 盾形・楕円筒埴輪…○ |
| B2工人タイプ…▼    | 二重口縁壺…×    |
| E工人タイプ…◆     | 家形埴輪…■     |
| J工人タイプ…★     | 圓形埴輪…□     |
| B1系-1工人タイプ…+ | 柱状埴輪…⊖     |
| B1系-2工人タイプ…‡ | 船形埴輪…⊕     |
| B1系-3工人タイプ…# | 蓋形埴輪…⊙     |
| BE工人タイプ…◇    | 推定埴輪位置…( ) |
| N工人タイプ…☆     |            |

0 10m

図13 造り出し部の埴輪の配置

※ (円筒埴輪Bと盾形埴輪は工人タイプと埴輪の種類の方を表記した)

また、東側ではB系工人タイプの円筒埴輪B (169, 175, 180, 190, 196) 以外にも円筒埴輪Bが出土しており、それらの円筒埴輪はB I系工人タイプの特徴を持つ。よってB系工人タイプ埴

輪は東側においては円筒埴輪Bとして、円筒埴輪Aの間に並べられ、北側においては円筒埴輪Aか円筒埴輪Bか区別は出来ないが、A、B区同様に連続して並べられていたと考えられる。

E工人タイプの埴輪は西側(149,150)の2個体である。前章で述べた通りE工人タイプの埴輪はE、K区においても見られるので、墳丘北側の広い範囲に並べられていたと考えられる。

I工人タイプは前述した通り、造り出し西側の土橋付近の円筒埴輪と、東、北、西の盾形埴輪の円筒部と考えられる(211~214。)墳丘上の盾形埴輪の円筒部に見られる。

BI系-1工人タイプは東側(166~168, 171, 173, 174, 181, 183, 184, 188, 193)の11個体と、北側(153)の1個体である。主に東側に集中しており、東側の円筒埴輪Aの(188, 193)は円形の透孔、(171, 181, 183, 184)は半円形の透孔が見られた。

よって、主に透孔が半円形の円筒埴輪Aにおいて突帯が太い特徴を持つBI系-1工人タイプの埴輪が多く見られたが、BI系-1工人タイプの円筒埴輪Aには共通して口縁部形態はカの(端部が三角に肥厚するもの)の特徴を持つ。また、半円形の透孔を持つ(171, 181, 183, 184)の埴輪の外面にはヘラ記号が見られず、円形の透孔を持つ(188)のみ外面に三日月のヘラ記号が見られた。(166, 168)は透孔の形が分らないが、底径が大きいという特徴を持つ。

円筒埴輪Bは(173, 174)が連続して並べられており、この2つは全体的特徴が似ているが、(153, 167)とは異なる。(153, 173, 174)は2段目に円形の透孔を持つ円筒埴輪Bだが、他の円筒埴輪Bが1.2~1.3cm程度であるのに比べ底部高が1.5cm程度と長く、異なる。(174)の上には壺形埴輪(235)が載っていたと考えられている。以上からBI系-1工人タイプの埴輪も、主に連続もしくは近接して見られる。

BI系-2工人タイプは東側(159, 161, 165, 172, 176, 178, 182, 185, 186, 192, 195, 198, 203, 204)の14個体と西側(136)の1個体である。主に、造り出し東側に集中しており、東、西の円筒埴輪Aの(136, 172, 176, 178, 182, 185, 186, 204)円形の透孔、(193, 195, 198)に半円形の透孔が見られた。よって、主に透孔が円形の円筒埴輪Aにおいて突帯が小さい特徴を持つBI系-2工人タイプの埴輪が多く見られた。透孔に半円形の(193, 195)において口縁部形態はカの(端部が三角に肥厚するもの)が見られ、円形の(178, 204)において、アの(端部が急激に外反するもの)の特徴が見られた。また、円形の透孔を持つ(136, 172, 178, 182, 204)には、2本線または3本線のヘラ記号が見られた。(159, 161, 165)はB系工人タイプと第一突帯までの長さが長い点で異なるが、その他の特徴はB系工人タイプと似ている。

以上からBI系-2タイプの埴輪も主に連続もしくは近接して見られる。

BI系-3工人タイプは、東側(160, 162~164, 170, 177, 179, 191, 194)の9個体と北側(152)の1個体である。突帯が残っていないために、BI系-1/2の2工人タイプの分類が出来ないが、(170, 177, 179, 191, 194)は、B1工人タイプの土質の埴輪がみられ、(160, 162~164)はB2工人タイプの土質が見られる。

BE工人タイプは、西側(137, 138, 143~148)の8個体である。この工人タイプは西側のみにしか見られない。土質、底部痕跡、剥離痕、歪みが見られる点でE工人タイプと似ているが、内面調整のユビナデ痕、突帯形態が主にB類(断面が細くて高いもの)の点でB工人タイプの特徴を持つ。(145, 148)には内面に2本線のヘラ記号が見られるなど、同様の特徴を持つ埴輪が連続または近接して並べられている。しかし、口縁部形態はイの(端部が突帯状になるもの)の特徴を持ち、この特徴においてはI工人タイプの影響も受けられていると考えられ、西側に連続または隣接して並べられている。

N工人タイプは西側のみに(139~142)4個体である。間に(212)の盾形埴輪を挟むが、西側の埴輪列に連続して並べられている。

### 第三節 造り出し部の工人関係

以上のように造り出し部の埴輪を新たに見られた工人タイプとその出土位置を見てみると、今までと同様に同じ工人タイプの埴輪は連続もしくは隣接して並べられる傾向が見られた。造り出し部の埴輪の工人関係について以下のようなことが言える。

#### I工人タイプ

造り出し西側土橋付近において、形象埴輪を製作した工人が製作したと考えられる円筒埴輪の中で(199~202)は円筒埴輪Bであり、上に壺形埴輪が載っていたと考えられる。これらの埴輪は土橋から転落した形で出土しているため、正確な位置は分らないが、西側造り出し部の上から土橋西付近に並べられていたと考えられる。また、I工人タイプの埴輪は造り出し部において、土橋西付近のみにしか見られておらず、この理由として、I工人タイプの埴輪のすぐ下に船形埴輪が置かれており、I工人タイプの埴輪は船形埴輪を守るという意図で製作され、並べられた埴輪だと推定することも可能では無かろうか。円筒埴輪Bの上に乗っていたと考えられる、(234)壺形埴輪においてもヘラ記号が描かれており、このヘラ記号はどの埴輪も見えない部分ではなく、埴輪の外側の透孔付近や口縁部付近などの見える位置に描かれている。これらはI工人タイプの埴輪工人達がヘラ記号を描くことで、自身の製作した埴輪と強く主張しているのではないかと考えた。そして、このような特徴を持つI工人タイプの影響を受けたのが、造り出し北、東区に見られる、BI系工人タイプの埴輪工人集団である。

#### BI系工人タイプ

BI系-1工人タイプは、B系工人タイプと同様の外表面の色調、土質が見られるものの、突帯が大きく、突帯形態がA類という点で、I工人タイプの影響を大きく受けたと考えられる。主に半円形の透孔が多く見られるという特徴を持つ。しかしBI系-2工人タイプの埴輪とB系工人タイプの埴輪に比べると、底径、底部高は異なり、その他の特徴においてはA、B区に見られるB系工人タイプの同様の特徴を持つ。BI系-2工人タイプの埴輪はBI系-1工人タイプに比べ、I工人タイプの影響をあまり受けていないと考える。また、BI系-2工人タイプの埴輪は主に円形の透孔が見られ、外表面にヘラ記号が見られるという特徴を持つ。

これらのBI系工人タイプの埴輪は主に東側に集中しているが、西側(136)の巨大な楕円筒埴輪においてもBI系工人タイプの特徴が見られる。そこで、(136)の楕円筒埴輪に注目してみよう。西側の(136)楕円筒埴輪を起点に、円筒埴輪列が始まっている。あるいは盾形埴輪的な意味合いをこめて(136)を置いたのではなかろうか。同様の様相は、B区の(15)においても見られ、B系工人タイプに共通する所作である。B系工人集団が造り出し部においても巨大な円筒埴輪を盾形埴輪の代わりに置いたのであろう。この(136)楕円筒埴輪の北側は、布掘りによって円筒埴輪列の痕跡が見られる。布掘りは造り出し東側の埴輪列まで巡っていたと推定できる。布掘りによって円筒埴輪が並べられたと推定できる(136)北側の埴輪から東側(198)までにB系、BI系工人タイプの埴輪が並べられていたのだらう。

さらに、B系工人タイプの埴輪は既述の如くA、B区に見られる。B系、BI系工人タイプの埴輪は、墳丘北側B区から造り出し西側(136)にまで並べられていたのである。また、東側(159~164)、北側(154~158)と東側から北側にかけて、B系とBI系-2工人タイプの埴輪が

近接して見られる。I 工人タイプの影響が少ないと考えられる BI 系-2 と B 系工人タイプの埴輪が造り出し北側という最も目につくところに並べられていたといえる。

### BE、N 工人タイプ

造り出し西側の (137) を起点とする埴輪列においては、B 系、BI 系工人タイプの埴輪は見られず、主に BE 工人タイプの埴輪が見られ、間に盾形埴輪と、N 工人タイプの埴輪が見られた。そこで、同じ埴輪列に並べられている N と BE 工人タイプの埴輪を比べると、外表面の色調が大きく異なり、E 工人タイプの埴輪工人集団とはあまり関係が無かったと考えられる。また、BE、N 工人タイプの埴輪は布掘りされて並べられてはいなかった。この埴輪列は造り出し西側下部の空間を封鎖する化の如く配置されている。

### E 工人タイプ

造り出し西側の後円部一段目埴輪列においては、(149, 150) に E 工人タイプの埴輪が見られた。よって、E 工人タイプは後円部一段目 (149) から E 区にわたって、連続もしくは近接して並べられていたと考えられる。しかし、E 工人タイプの埴輪は K 区の二個体においても見られるため、造り出しを含む、墳丘北側の広い範囲に置かれていた可能性がある。

E 工人タイプの埴輪工人集団が、B 系、BI 系、I 工人タイプの影響を受け、BE 工人タイプの埴輪を製作し、造り出し部西側に並べたのではないだろうか。

## 第四節 造り出し部埴輪の樹立と工人集団

これまで、造り出し部において新たな特徴が見られた円筒埴輪を、I、BI 系、BE、N の工人タイプに分け、工人と配置の関係について検討してきたが、以下、造り出しにおける製作者集団と配置についてまとめておこう。

B、BI 系工人タイプの円筒埴輪は造り出し 1 段目平坦面の東側 (198) から、西側 (136) の北側の布掘りされている区間で並べられたと推定した。造り出し西側においては、BE、N 工人タイプの円筒埴輪を造り出し 1 段目平坦面から、西側 1 段目平坦面に並べ、造り出し西側を閉鎖したと推定した。

つまり、造り出し部においては、二つの工人集団による円筒埴輪がみられ、東西に分かれてそれぞれで埴輪を分担して並べたのではないのだろうか。

東側の導水囲形埴輪などの形象埴輪の一群を取り囲む円筒埴輪を担当したのが、B 系、BI 系埴輪工人集団である。

西側の湧水の囲形埴輪の形象埴輪の一群を担当したのが、E、BE 埴輪工人集団である。ただし、西側で最も重要な船形埴輪の周りには、I 工人集団の埴輪が置かれていた。

造り出し東側に注目すると、B 系、BI 系工人タイプの円筒埴輪列と囲形埴輪や、壺形埴輪、家形埴輪などが並べられている一群の間には円筒埴輪 (179, 180, 203) が原位置で見られる。

(203) は口縁部しか残っていないが、(180) は円筒埴輪 B と推測できる。(179) は円筒埴輪 B の可能性があるが、底部が残っていないため不確かである。また、これらの埴輪列の隣の埴輪列には (173~175) があり、円筒埴輪 B である。3 個体が連続して並んでいる。円筒埴輪 B の上には壺形埴輪が載っていたと考えられる。円筒埴輪 B が埴輪列に連続して並べられ、隣接する埴輪列ではない間にも並べられている。円筒埴輪 B のすぐ東には二重口縁壺が囲形埴輪を囲うように南北と、東西に L 字形に並べられている。葦石に沿って L 字形に並べられていないため、葦石と平行に並ぶ壺形埴輪 A の間には空間が見られる。この空間を意識し、閉鎖する意図

で(173~175)を埴輪列に並べ、さらに、埴輪列ではない間の位置にも(179, 180, 203)の円筒埴輪を葺石に沿って並べている。

造り出し西側においては、BE、N工人タイプの円筒埴輪が造り出し西側を閉鎖している。また、I工人タイプの円筒埴輪が、造り出し上面と土橋付近に並べられ船形埴輪を囲繞するが如く樹立されていた可能性がある。とするならば、船形埴輪は、二重の埴輪列によって囲繞されていたことになる。船形埴輪は宝塚1号墳の被葬者と深い関係にあったことはいうまでもない。王の船として位置づけられていたことは船首と船尾に立てられていた蓋形ミニチュアと、大刀形ミニチュアによって知ることができる。にもかかわらず船形埴輪は外部からは最も見えにくい位置に船首を土橋側に向けて置かれていた。船形埴輪は設置位置が固定され、必要に応じて設置したり、排除したりすることが可能であった。宝塚1号墳の被葬者にとって、船形埴輪は、日常的には隠すべき極めて重要な道具立てだったのである。

ところで、船形埴輪の反対側、つまり造り出し東側の円筒埴輪(189)の中に詰め込まれた状態で、船形埴輪の断片が出土している。(189)の円筒埴輪は埴輪列に並べられておらず、列からはみ出しておかれている。その中にもう一艘の船形埴輪が投棄されていた事実をどの様に解釈すればいいのだろうか。

既に分析したように、造り出し部東西の埴輪配置は左右対称とはかけ離れているものの、置かれている埴輪の種類は東西でほぼ同種である。船形埴輪の設置方法は異なるものの、空間を封鎖するかの如く設置された(189)の存在など、それなりの共通性を有している。陰と陽、ハレとケ、日常と非日常のような対立する世界を表しているのではなかろうか。その区別にも円筒埴輪製作工人が整然と区別され、分担している点は刮目しなければならない。

(189)はF工人タイプの埴輪である。F工人タイプの埴輪は墳丘南側くびれ部付近に主に並べられ、墳丘北側、造り出し部においては、造り出し西側の(151)に1点見られる。この(151)の円筒埴輪はF工人タイプの埴輪よりやや明るい色調を呈し、別の工人タイプの可能性もないわけではないが、古墳のキーポイントに置かれた特別な埴輪と理解しておきたい。

おわりに

これまで、宝塚1号墳を墳丘南、2段目、墳丘北、造り出しに分け、工房や行人グループの違いによる樹立のあり方を分析してきた。最後に、宝塚古墳築造者がなぜこの様な工人グループを使い分けて埴輪を樹立したのか、この点について私見を述べてまとめたい。

宝塚古墳には外来系技術による明色工房と在地系技能者集団によって構成された暗色工房のあることを示した。2工房の製作した埴輪の配置から、宝塚1号墳では見える側と見えない側で埴輪製作工房が区別され、優れた技術を有する外来系技術者集団と、一部技術を習得した在地系工人集団によってようやく埴輪を伴う古墳としての面目を保った。

伊勢地域初の本格的な埴輪を樹立した古墳として築造が開始されたにもかかわらず、在地には埴輪を製作するにたる技能集がはなかったのである。この事実は5世紀初等段階における伊勢地域の「工業生産力」を知る上で極めて貴重なデータではあるがその意味を深化させて検討することはできなかった。

古墳築造を賄いきれない技術を補うために、おそらく伊賀地域で石山古墳を築造したグループから一部を割いて円筒埴輪製作の技術指導が行われた。しかし、形象埴輪を製作するに足る

技能がなかったために、一部の盾形埴輪を除き、大半は円筒埴輪の作成指導に当てられた。しかしその結果、BI系-1・2・3等の工人グループが成立し、造り出し部や北側を中心に樹立を可能にした。それでも十分な技能を発揮できなかったグループの製品は、余り見ることのない南側に、工人の製品毎に並べられたのであった。

ただし、F工人集団の埴輪だけは在地で製作されたものでありながら、丁寧に規格化されており、重要な位置にのみ使用された。こうした外来工人の指導を受ける中で台頭した指導者的立場の工人群であった可能性がある。

こうして形成された埴輪生産体制がその後どの様に展開、発展、衰退したのかについて検討する絶好の材料宝塚2号墳の円筒埴輪である。1号墳と同様に埴輪工人の関係について考察し、比較する予定であったが、及ばなかった。今後の課題としたい。

#### <参考文献>

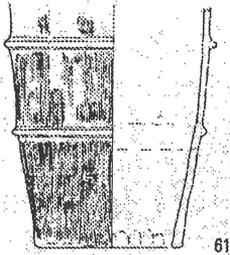
- 近藤義郎・春成秀爾1967：「埴輪の起源」『考古学研究』、13-3 考古学研究会  
穂積裕昌1997：『第17回三重県埋蔵文化財展 三重の埴輪』三重県埋蔵文化財センター  
穂積裕昌2005：「伊勢における窯出現以降の埴輪生産～その系統と工人編成～考古学フォーラム17  
高橋克壽1996：『歴史発掘9 埴輪』講談社、  
古谷毅2003：「埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交差流の政治史的研究」  
東京国立博物館  
松田 度2007：「造り出しにみる埴輪配置の構造—松阪市宝塚一号墳の事例から—」 同志社  
大学考古学シリーズ IX 考古学に学ぶ(III) 森 浩一先生傘寿記念献呈論集  
川西宏幸1978：「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号  
竹内英昭1991：「伊勢地方の埴輪事情」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会

#### <参考資料>

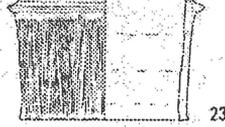
- 松阪市教育委員会2005：『史跡宝塚古墳保存整備事業に伴う宝塚1号墳・2号墳調査報告書 本文編・図版編』  
松阪市教育委員会2002：『第2回松阪はにわシンポジウム 宝塚古墳の源流を求めて—大和・河内と伊勢の埴輪』  
松阪市教育委員会204：『第4回松阪はにわシンポジウム 関東の埴輪と宝塚古墳—まつりの移り変わり—』  
松阪市文化財センター：はにわ館開館記念図録（松阪市・松阪市教育委員会、平成15年3月）  
三重大学歴史研究会原始古代史部会：「伊勢湾西岸における前方後円墳」『ふびと』29号  
三重大学歴史研究会原始古代史部会：「松阪地区における埋蔵文化財の調査」『ふびと』31号

#### <巻末資料> 各工人タイプの円筒埴輪の代表例

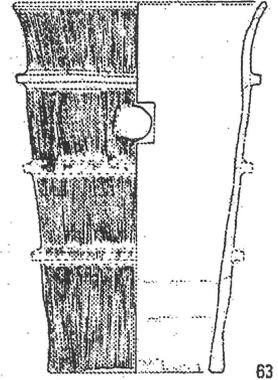
(なかの あやこ 三重大学人文学部文化学科 2010年度卒業)



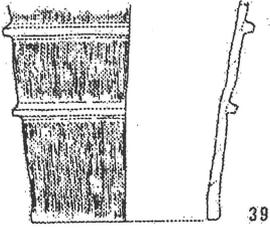
H1 工人タイプ



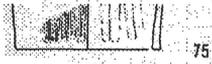
H2 工人タイプ



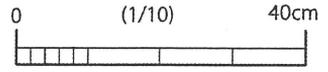
H3 工人タイプ

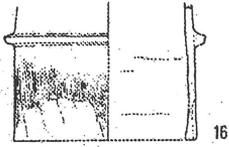


F 工人タイプ

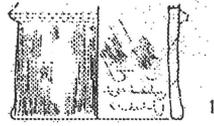


B' 工人タイプ

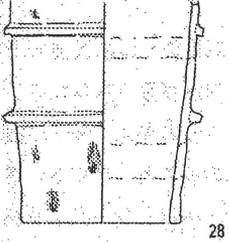




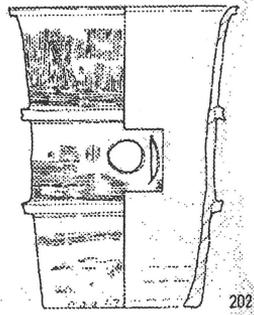
B 1 工人タイプ



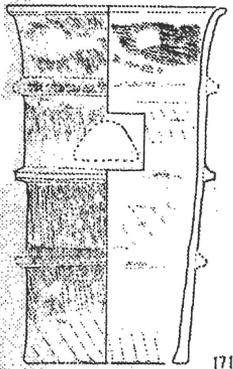
B 2 工人タイプ



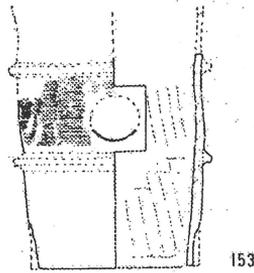
E 工人タイプ



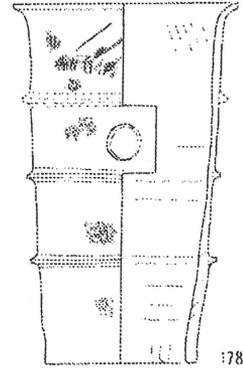
I 工人タイプ



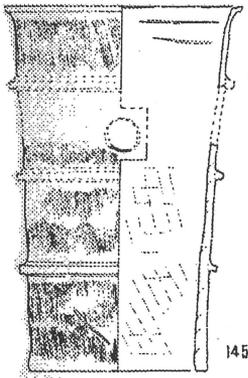
B I 系-1 工人タイプ



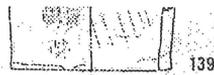
B I 系-1 工人タイプ



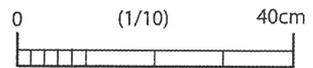
B I 系-2 工人タイプ



B E 工人タイプ



N 工人タイプ



工人タイプ	番号	種類	外面調整	ハケ	内面調整	突大きさ			突形態			口径	口縁厚さ	口縁形態	透孔	透孔の大きさ	器高	底部径	底部高	1~2	2~3	3~4	土色	土質	底部痕跡	備考
						①	②	③	①	②	③															
H1	61	円A	I	B	1-①	0.7	0.9		b1	b1				○	横4.5		21	16	11.2			濃黄土	2	有少	埴輪の造りが薄い	
H2	23	円A	I	B	1	0.9			b3								23.5	15.3				暗黄土	3	有細	埴輪の造りが薄い剥離痕	
H3	63	円A	I	B	1-①②			1.1			A2		0.8	ウ	○	縦4.5	51	23	15.5	10.2	10.3	暗黄土	3	有多	埴輪の造りが厚い	
F	39	円A	I	C	1-①	1	1.1		a2	a1							25.5	14.8	10.4			濃黄土	1	有多	埴輪の造りが薄い	
B'	75	円A	I	C	1-①④												20					暗赤茶	4	有少	埴輪の造りが薄い	
B1	16	円A	I	D	1-①	1.1			B4								27.5	13.4				黄土	6	有少	埴輪の造りが厚い剥離痕	
B2	1	円A	I	D	1-①③④												24.5	12				濃茶	5	有少	埴輪の造りが厚い	
E	28	円A	I	D	1	0.9	1		A1	A4							23.5	14.8	11.2			黄土	6	有少	埴輪の造りが厚い剥離痕、歪み	
I	202	円B	II	D	1-①④							30.2	1	イ	○	4.8×4.5	44.1	23.8	14.4	11.6	14.1	明茶	6	有細	埴輪の造りが厚い三日月へラ記号	
BI系-1	171	円A	I'	D	1-①②④		1.1			A1			1.1	カ	△		52.2	24.9	15.5	11.5	10.6	10	濃黄土	5	無	埴輪の造りが厚い
	153	円B	II	E	1-①④	1.1			A3						○			23.5	15	11			黄土	6	有少	埴輪の造りが厚い剥離痕
BI系-2	178	円A	I	E	1-①④	0.6	0.8		B1	B1			0.8	ア	○	5×4.6	51.5	22.9	15	10.2	9.9	10.1	黄土	6	有少	埴輪の造りが厚いへラ記号
BE	145	円A	I	D	1-①④	0.9	1.1		a1	A1			0.8	イ	○		53.5	26	14.2	11		9.5	赤茶	5	有細	埴輪の造りが厚い内面へラ記号
N	139	円A	I'	E	1-①④												23						薄黄土	5	有多	埴輪の造りが薄い剥離痕